

論 説

キャリル・フィリップスの『血の性質』論 ホロコースト・サバイバー

加 藤 恒 彦

序論

『血の性質』¹⁾はユダヤ人と黒人にまつわる歴史を素材とした三つの物語が織りあわされた小説である。中世末期におけるキリスト教徒によるユダヤ人への宗教迫害事件、それと同時代の黒人オセロの物語、そして現代を舞台にしたユダヤ人への人種主義に基づくホロコーストを核とした物語である。拙論においてはホロコーストにまつわる物語に集中して論じることになる。

黒人体験とホロコーストの意義

アメリカやカリブの黒人にとっての奴隷貿易と新世界での奴隷体験に相当するのがヨーロッパのユダヤ人の三分の二にあたる600万人が虐殺されたともいわれる²⁾ナチスによるホロコースト体験であろう。それらは黒人とユダヤ人のどちらにとっても忘れられず、かつ忘れてはならない記憶であろう。また、そのどちらにも属さない人間にとっても知っておくべきことであろう。何故なら、現代の世界は人種、民族、宗教、文化の違いに基づくそのような人類史的な不正を土台とし、かつその反省にたって出来上がっているはずだからである。「はずだから」というのは第二次世界大戦後の世界秩序がそのような過去を二度と繰り返さないという人類的な合意の上に成立しているとはいうものの、その実現にはまだ道遠しというのが現状だからである。そしてまた土台となる過去を単なる過去として忘却するのではなく現代的観点から語り継ぐという営みが人類の理性的到達点を踏み固める上でも重要だからである。

フィリップスとユダヤ人体験

キャリル・フィリップスはイギリスと黒人の関係の歴史が無視されていた時期にイギリスで黒人として育ったことから、ユダヤ人迫害の歴史を通してイギリス社会における黒人への現実の差別を理解し、ユダヤ人体験に一体化した経験をもっている。これまで黒人の歴史的体験を中心に描いてきたフィリップスが『血の性質』のなかでホロコーストをテーマにし得た所以で

ある³⁾。『血の性質』のなかに出てくるエバの母親の「何も悪いことをしていない人々にこんなに腹を立てるなんてどうしてできるの?」(93)という言葉はユダヤ人のみならず、そのまま黒人体験にも当てはまるからである。

『より高い土地』との関係

ホロコーストを扱った小説としてフィリップスは『より高い土地を求めて』⁴⁾においてホロコーストで家族を失った女性の心理的トラウマを描いたが、『血の性質』においてはナチスの強制収容所体験そのものが正面に据えられ、それを生き残った主人公の姿が描かれているのである。

ホロ コーストを描く想像力

強制収容所の体験が奴隷制度の下での黒人体験と多くの類似性を持ちながらも決定的に違うのは、奴隷制度の目的がプランテーションにおける労働力として使用することであったのに対し、強制収容所はユダヤ人の抹殺を最終目的としていたという点であろう。従って奴隷を労働力として維持するという関心や配慮は不必要であったのだ。そこから強制収容所でのユダヤ人にたいする扱いの想像を絶する非道さの理由が明らかとなるだろう。作家がぶつかるであろうことは、そのような通常的人間的日常をはるかに越えた体験をどのように定義し、どのような言葉で語ればよいのかという点であろう。また、ユダヤ人のなかにはそもそも黒人がそれを描くということに異議を申し立てる人々もいる⁵⁾。

拙論のテーマはフィリップスがそのような難問にどのように答えているのかを様々な角度から検討することにある。したがって、まずその手がかりとして、フィリップスのアプローチの特徴について検討しておきたい

視点について

フィリップスは歴史を小説の素材にしてきた作家らしくホロコーストに関する膨大な資料に立ち向かい、それを消化するなかで、生き残ったエバという若い女性を主人公にし、その家族を中心に物語化するという方法を取っている。だがエバの視点には様々なスタイルがある。

エバの家族に関する記述のように相対的に客観的な記述で描かれているもの、ナチスの迫害が深刻になるなかでの様々なエピソードや隠れ家生活の描写のようにエバの視点からの受け止めでありながら依然として客観的な描写としての性格を色濃くもっている部分、収容所での悪夢のような日常とシュールリアルな悪夢、死んだ母親を生きていると思ひ込む幻想の世界、イギリスにわたったエバを待ち受けていた最終的な絶望の体験等のようにエバのトラウマに捉われた意識の世界を描いているもの等、エバの意識の状態に沿ったさまざまなレベルの語りの方

法が駆使されている。それは強制収容所の生活が人間としての心理・心に与えた衝撃をリアルに伝え、社会科学的方法によっては伝えられない実存的レベルにおける強制収容所の生活の意味に迫る試みである。フィリップスの語りのそのような局面を捉え、それを分析することによってトラウマのもつ構造を探るのも拙論の目的である。

だが、フィリップスはエバの視点からのみ小説世界を作り上げているのではない。エバが知りえなかった姉のマーゴットの死などは作家の視点で、アウシュビッツのガス室での殺害の様子などは強制収容所の責任者の残した記録を利用して描かれる。また、イギリスでエバの主治医となった精神科医の残した文献は、エバの自殺を通してそれまで名前のなかったホロコースト・サバイバーたちが捉われた精神の病の存在に研究者たちが気づいていったことを示している。このようにしてエバの体験を中心に据えながらもより広い世界のなかにそれを位置付けるという意図をここに読み取ることができよう。

このようにして『血の性質』のなかにはホロコーストをめぐるものだけを取り上げても相互に異なる様々な語りが交差し、ポリフォニックな響きを奏でているのが理解できよう。

物語の現在と過去

また物語は直線的な時間の経過にそってではなく、フラッシュバックの手法を駆使しつつ、現在の意識と過去とを重層的にかさねる手法をとっている。つまり、物語としての現在をイギリス軍による解放時に置き、そこからの主人公の新たな人生の展開を機軸に据えつつ、エバの脳理に生起するそれまでの収容所体験やそれ以前の出来事が絶えずフラッシュバックの手法で挿入され、読者はエバの人生や意識の成り立ちを再構成してゆくことになるのである。こうして読者による積極的参加を促す手法がフィリップスの重要な小説手法であり、また彼の小説を読む楽しみでもある。

シオニズムのテーマ

だが、ホロコーストにはもうひとつの物語が付随していた。それはナチスの迫害のもと、パレスチナに殖民し、そこに「約束の地」としてのイスラエル国家を建設しようというシオニズム運動であった。エバの叔父ステファンの物語がそれである。ステファンの物語はエバのドイツでの生活の時代にもさしはさまれているが、同時に小説全体の冒頭のエピソードとエピローグを飾っている。前者は、ホロコーストの事後物語であり、イスラエル建設のためにキプロスにまでやってきてパレスチナ入国を待つ東欧ユダヤ人難民キャンプでのステファンと難民の少年との出会いを描き、後者は、現代イスラエルで老齢に達したステファンとエチオピアからイスラエルに移送されたユダヤ黒人の若い女性マルカとの出会いを描いている。

不安と希望にあふれた冒頭のエピソードと晩年のステファンの現代イスラエルへの冷めた意

識の落差とは何であるのかも拙論のテーマである。

場所や年代が不特定であることの意味

フィリップスは地名も場所も年代もほとんど具体的に記述することなく読者の推測にまかせながら（あるいは読者の積極的な参加を誘いながら）物語を書き進めている。それは一つの手法であるとともに、ホロコーストの歴史に内在的な特長とも関係していると思われる。たとえば舞台となる地域や国、あるいは収容所の名前を特定していないのには次のようなホロコーストの特徴が関係しているのではないかと考える。

すなわち「ドイツが1933年から1939年にかけて自国のユダヤ人に、また1938年にオーストラリアのユダヤ人に対してとった政策がたちまち被占領国における対ユダヤ人政策のモデルとなったのである」⁶⁾。つまりナチス・ドイツの支配下に置かれることになった他地域のユダヤ人は多かれ少なかれドイツにおけるのと共通したユダヤ人政策のもとに置かれ、類似した体験をしたからである。たとえば「ユダヤ人は他の市民から類別され、続いて公民権を制限され、財産が没収された。さらに大学や公的職業からしめだされた。・・・ユダヤ人は知的職業につく権利を奪われた」⁷⁾そして最後に家畜輸送車によってユダヤ人絶滅のための強制収容所送りを体験したのである。

より具体的にいえばエバが体験した隠れ家での生活はオランダでアンネ・フランクが体験したのもであり、ドイツと特定しないことにより、より広い読者の自己同一化を図れ、普遍的な体験としての印象を与えることができるのである。

小説世界と歴史的事実

とはいえ、フィリップスの記述を歴史書に照らし合わせてみると、フィリップスが特定の場所や年代を念頭に置いていると推測できる証拠がある。たとえば、エバの家族が住んでいたのはドイツであろう。というのはエバの家族に降りかかる迫害のテンポは比較的緩やかであり、幾つかの時期を経ながら次第にその深刻さを増してゆき、ついには手遅れとなっていったと描かれている。

ドイツでは1933年1月末のヒットラーの政権掌握からユダヤ人大量虐殺政策が事実上決定されその準備段階に入っていた1941年夏にいたるまでの月日を要しているのにたいし、ナチスによって合併された国々（オーストリア、チェコスロバキア）、あるいは軍事占領下の国々では類似したことが急速に実施されているのである。

またエバが解放されたときにいた収容所はベルゲン・ベルゼン収容所だと推定できよう。というのはイギリス軍によって1945年4月に解放されたとして歴史書に載っているのがベルゲン・ベルゼンだからである。そこはあのアンネ・フランクがアウシュビッツから移送されて死

を迎えた収容所でもあり、主人公エバがアンネ・フランクのように隠れ家で数年を過ごしたことを考えると一層それは納得のいく推測となる。またその収容所には「行進」によって他の収容所から移送され解放まで4ヶ月を過ごしたことがさりげないエバの言葉から示唆されている。事実、歴史書を参照するとソビエトと連合軍の侵攻によって追い詰められたナチスが占領地の収容所を撤収し、ユダヤ人をドイツ国内の収容所に行進を含めて移送したことがわかる。ベルゲン・ベルゼンはそのような収容所の一つであり、アウシュビッツ第二収容所にあたるビルケナイ収容所から移送されたユダヤ人がいたことが確認できる。その収容所にエバが2年居たという小説のなかの言及（184）を根拠に逆算するとエバが収容所に送られたのは1942年頃となり、収容所でのユダヤ人大量殺害が開始された時期とほぼ一致する。だが、エバはそこで選別され強制労働に従事したのであるから、実際にはビルケナウの強制労働所がモデルになっているといえよう。そして隠れ家には2年の間居たということから逆算すると隠れ家に移ったのは40年前後のことであつたらう。

歴史的記述とフィクションの狭間

地名や年代が明記されていないにせよ、それなりに歴史的裏づけがあつて書かれているだけではない。一見文学的と思われる収容所体験の記述も実は実際の被収容者の証言をそのまま引用したものである場合もかなりある。たとえばビルケナイに収容されていた人の証言やナチスのヘスの証言が幾つかそのまま使用されているのである⁸⁾。

このようにしてフィリップスは上記のような様々な手法を駆使しつつ、かつホロコーストについての膨大な歴史的資料に依拠してこの小説世界を作り上げている。ではそれは小説としてのこの作品の独自の意味という観点からはどうなのであろうか？何がこの作品に小説としての独自の性格や意味を与えているのであろうか？

それはかけがえのない一個の人間の生とホロコーストの出会いの物語として、つまり実存的なものとしてホロコーストを描くということである。

ではフィリップスは歴史的素材を総体としてどのようなアングルから扱っているのだろうか？フィリップスは社会科学者のようにホロコーストの原因を明らかにするというアプローチは取っていない。あくまで人々の人生に突然降りかかってきた社会的災難に人生を破壊された人々の人生を統計学的、社会学的にはなく、実存的に描いているのである。次に具体的にそのことを見てゆきたい。

エバの家族を設定した意味

フィリップスはエバをどのような社会的、家族的設定のもとに描いているのだろうか？エバの家族には古くからドイツ文化に同化し、金融や医学の分野で成功を収めた家族の家系と貧しい東方ユダヤ人の系統の二つが入り混じっている。父親は貧しいユダヤ人の生まれであったが、教育に貧困からの逃げ道を見出し、勉強辛苦の後に医学を修め、著名な医師に認められ、その医師のパートナーとして働くことになる。そしてそこで父親は医師の娘を見初め、二人は娘の家族の反対を押し切って結婚したのである。だが娘の家族は銀行家を始めとする名門の家系であったのである。

「身分違い」の結婚は二人の結婚生活をかならずしも幸せなものとはしなかった。母はエバの父親を愛しながらも名門の出であるという誇りを捨てることができず、貧しい農村で育った父親との間に溝が生まれる。妻に心を開くことができなかつた父親はエバとマーゴットという二人の娘を妻以上に愛し、妻は家族のなかで孤立することになった。だが父親は医師としての成功を収め4階建ての家をもつまでになっていた。

フィリップスがそのような家族を取り上げたのはユダヤ人の社会的同化が比較的進んでいたドイツ、しかも金融や医学といった分野で高い地位を占めるといふドイツ的状况と関係しているであろう。しかも家系に貧しいユダヤ人の系統を入れることにより、ユダヤ人の全てが成功者では決してなかつたこと、またそういう高い地位を得るためにユダヤ人が払った成功の代償（身分違いの結婚による不幸）も同時に描くことができたからであろう。

フィリップスは、そのような社会的地位や財産、それを獲得するに支払った代償にもかかわらずユダヤ人としての彼らの地位がナチスが支配する「第三帝国」のもとであやうくなってゆく経過をコラージュ風に、フラッシュバックの手法で描いている。

何故ホロコーストは起きたのか

だがそもそも何故そのようなユダヤ人の悲劇が起きたのか。フィリップスは社会的・歴史的原因には触れていない。むしろむしろそれを降ってわいた不条理な与件として描き、それを一家が、そしてエバがどう受け止め、どういう思いで体験したのかという点に焦点をあてている。

それは作家としてのひとつの選択である。ナチス台頭とホロコーストの社会科学の分野での文献は山とあり、ヨーロッパの一定の知識層にとってはすでに既知のことでもあろう。だからこそフィリップスは屋上屋を重ねることよりも、文学として実存的な観点からホロコースト体験を描くことに専念したと考えられる。

だが日本のとくに若い世代にとってナチの台頭やユダヤ人問題やホロコーストは決して既知の事実ではない。そういう点を考慮し、若干の背景説明を行なっておきたい。

ユダヤ人問題とホロコースト

ユダヤ人はキリスト教が支配する中世ヨーロッパでキリスト殺しという宗教的理由で迫害の対象となり、ユダヤ人ゲッターに居住地を制限され、土地の所有を禁止され、カソリック教のもとではキリスト教徒が従事することを許されなかった金貸しや商業の分野につくことをよぎなくされ、それがもとでまた憎まれ、非難されることにもなったのである。

近代にはいり、フランスの啓蒙主義運動はキリスト教の迷信を暴こうとし、ユダヤ教徒をキリストの受難ゆえに批判することはなくなつたにせよ、ユダヤ人への偏見と積極的に闘おうとはしなかった。ユダヤ人が公民権を得るのにはフランス革命を待たねばならなかった。だがその場合にもユダヤ教徒としての慣習や共同体としての特質を捨て、ヨーロッパ文明に同化することを条件としていた。ナポレオンはドイツにおいてもユダヤ人の法的平等を導入した。ナポレオンの敗北の後、ピスマルクの国家統一によって再びドイツではユダヤ人の法的平等が復活する。そうしたなかでドイツやオーストリアのユダヤ人のなかにはキリスト教あるいはヨーロッパ文化に「同化」し、教育によって金融、ジャーナリズム、学問、医学、法、芸術などの分野に積極的に進出し、顕著な功績を上げるものも輩出した。

しかし、反ユダヤ主義は消えたわけではまったくなかった。反ユダヤ主義は以前の宗教的理由から人種主義的色彩を強め、右翼のみならず左翼の政治家・思想家の言動にも現れるのである。そしてロシアではユダヤ人へのポグロムという大量虐殺が始まり、何百万というユダヤ人が西ヨーロッパやアメリカに移住する。

また19世の末のオーストリアにおいては東方ヨーロッパ系の多様な民族をかかえる他民族連合国家に反発・対抗する多数派のドイツ系住民によるドイツ民族主義が台頭し、人種主義的「反ユダヤ主義」に訴えることによってウィーン市長選挙に見られるように成功する。フランスにおいてはユダヤ人将校を国家反逆罪で逮捕するドレフェス事件が起こる。若き日のヒトラーはウィーンでそのような「反ユダヤ主義」に強く共感したといわれている。これは右翼的政治潮流の流れであったが、左翼の側にも「反ユダヤ主義」があり有効に「反ユダヤ主義」と闘えなかった。そのような流れに反発したユダヤ人のなかからヨーロッパでの「同化」の方向に見切りをつけ、パレスチナを『約束の地』とし、ユダヤ人自身の国家の建設を求めるシオニズムの運動も始まったのである⁹⁾。

だが、大部分のユダヤ人はそれぞれの地で生き延びてゆけるという方向に望みを託していた。このようなユダヤ人を巡る文化・政治状況が底流としてドイツにもあった。

だがドイツにおいて人種主義的「反ユダヤ主義」を政策の中核とし、議会制度を破壊し、一党独裁をめざし、軍国主義的領土拡張をめざすナチスが1933年1月に首相に任命されるという政治的展開を抜きにしてホロコーストはありえなかったであろう。当時において最も発達した産業力と優れた文化を誇り、かつ強力な左翼勢力を持っていたドイツにおいて、いかにして

ナチスのような政党が権力の座にたどり着くことができたのであろうか。

何故ナチスは権力を掌握できたのか？

リチャード・エバンスは『第三帝国の到来』¹⁰⁾においてビスマルクの出現から1933年に至るドイツの歴史を総合的に分析し、その問いに答えようとしている。膨大な著書を私なりにまとめてみると、次のような構図が浮かびあがってくる。

1929年にアメリカに発する世界恐慌のなかでドイツは大量の失業者と社会不安をかかえていた。そうしたなかで、深刻な不況からの出口を巡って国民が大きく左翼的方向と右翼的方向に両極分解し、ドイツ国民は結局右翼的「解決方法」を選んだということである。

ドイツの左翼陣営は19世紀末以来、労働者階級を中心に大きな勢力をもっていたが、第一次世界大戦時にドイツの戦争を支持するのか、あるいは反対し、革命を目指すのかをめぐりソビエト型の革命路線を目指す共産党とそれに反対する社会民主党に分裂・対立し、相互に深い不信の念を抱きあっていた。

他方、右翼的潮流のなかで深刻で長引く不況のもとで既存の諸政党が国民の支持を失うなかでナチスが飛躍的に勢力を拡張した。すなわち1930年の総選挙において共産党と社会民主党があわせて220議席を確保する一方、28年の総選挙までは12議席しかもたなかったナチスが一挙に107議席を獲得し、その他の反マルクス主義政党が大幅に議席を減らしたのである。その結果、ワイマール共和体制に敵対的な共産党とナチとが議場で正面から対立し、社会民主党がワイマール議会政治を守ろうという立場から政府の予算を通過させるために議会運営に協力するという奇妙なことになり、それに反発するそれまで連合政権を支えていた他の政党が政府を支持しなくなる。その結果、国会が機能しなくなり権力の真空状態が生まれ、権威主義的な独裁以外に国家を機能させる道がなくなってしまったことである。イツの財界や中産階級は左翼の台頭を恐れ、ナチスにそのような空白状態を埋める役割を求め、1933年1月のヒンデンブルグ大統領によるヒットラーの首相任命という事態に至ったのである。

ナチスがそのような役割を果たすことになったのは何も彼らが新奇なイデオロギーを持っていたからではない。逆に、「既存のしばしば深く根付いた社会的、政治的諸価値でもって訴えることによってのみナチはあのように素早くドイツ最大の政党になることが出来たのである」(448)。その諸価値とは共産主義への憎悪と「ドイツの愛国主義、すべてのドイツ人をひとつの国家に統合するというビスマルクの未完の仕事を戦争における征服において完遂するという汎ドイツ的な構想、アーリア民族の優秀性についての確信、ユダヤ人からの脅威、優生学的計画や人種衛生への信念、制服に身を包み、編隊に組み入れられ、従順で、いつでも戦闘に参加できる社会という軍国主義的理想等である」(448)。

ナチスはヒットラーのカリスマ性、行き詰まった民主制への擬似的解決方向の提示、突撃隊

によるテロによる社会不安の醸成、首相としてしか連合政権には参加しないという戦術、合法的手段によって政権をとろうという戦術等によってそのような役割を果たしたのである。

こうして1933年一月末に政権を掌握するやヒットラーは反対勢力を徹底的に弾圧すると人種主義的反ユダヤ政策を次々と打ち出す。この年だけをとってみても3月にドイツ初の強制収容所を建設し、4月にはユダヤ人商店ボイコット運動、高等教育機関におけるユダヤ人学生の数の制限、ユダヤ人の公職追放、5月には焚書、9月には報道、文学、芸術界からのユダヤ人締め出し、35年にはユダヤ人の公民権を奪うニュルンベルグ法を發布し、38年にはオーストリアを併合する一方で約1,500人のユダヤ人をドイツ国内の強制収容所に送り、シナゴーク破壊事件を起こし、ユダヤ人医師のアーリア人への治療の禁止、チェコのズデーデン地方のドイツによる合併を黙認したミュンヘン会談を背景にユダヤ人への大規模なテロ行為である「水晶の夜」が起き、39年にはチェコ合併、ポーランド侵攻、第二次大戦勃発、40年にはアウシュビッツの設置がヒムラーによって指示、41年7月ゲーリング「ユダヤ人問題の最終解決」準備を指示、9月アウシュビッツで最初のガス殺実験、10月ドイツ、オーストラリアのユダヤ人ポーランドへの移送開始（「東方移送」）、42年1月、ヴァンゼー会議「ユダヤ人問題の最終解決」正式宣言がなされ、これ以後ユダヤ人の強制収容所送りとそこでの殺害が本格化し、45年まで続くのである。

『血の性質』の読み方

この小説のなかではそのような情勢の展開への理解を前提とし、場所や個々の年代を多くの場合伏せたまま、さまざまなエピソードがコラージュ風につながりあわされているのだが、読者が背景にある年代を意識して読んでゆくと、その意味が一層鮮明となり、かつそれがいつ、どこで起きたことなのかも理解できるのである。その意味でこの小説は読者の読解過程への参加を前提とした小説なのである。そこで小説のなかで描かれているエピソードをドイツでのユダヤ人をめぐる社会情勢の変化を念頭において読んで見ることにする。

シオニズムを選択ステファンの姿

ナチスの台頭に直面したドイツのユダヤ人社会では、ドイツを捨てパレスチナでのユダヤ人国家をめざすシオニズム運動に身を投じる理想主義的な人々が生まれる。この小説では、エバの父親の弟で医学生であったステファンを通じてそのような動きが描かれている。ステファンが、ドイツに残り生き延びることに希望を見出すエバの父親とは反対の生き方を選択し、時折一家を訪れては父親と大論争を繰り広げるのをエバも知っていたのである。(78 - 80)

エバは、父の助けを求め時々家を訪れるステファンの下で働く青年達の口を通じ、彼がシオニズムの立場にたち当時イギリスの植民地であったパレスチナでのユダヤ人国家の建設に夢を

たくし、パレスチナでのユダヤ人「地下軍事組織の指導者の一人」として活動していたのを知る。

だがエバの父親は、弟のそのような選択には大反対であった。医師の勉学を途中で放棄し、妻や子供を捨て、「野蛮人が住むアラブに国を作る」なんて考えられないことだったのである。だが、ステファンは「お兄さんは自分たちがユダヤ人だということを忘れたのか？われわれはいまだに自分の国をもたない唯一の民なんだよ」と反論する。(75 - 6)

ステファンの妻は、「あなたの選択を尊重するから私の選択も尊重して」とドイツでの状況が悪化する前にアメリカへの移住を選択したのであった。しかしこの苦渋の選択は一生ステファンの心に重く残るのであった。

エバは、そのようなステファンの姿を垣間見、自分には未知なる世界を作り出すべく活動する英雄、自分達姉妹と遊んでくれたなつかしい存在として覚えていたのである。

ステファンはパレスチナへと旅立つのであるが、それは恐らくは33年だと思われる。何故ならそれから2年後家族の屋敷を訪れたステファンの配下の男は、ユダヤ人から公民権を奪ったニュルンベルグ法(1935年9月)に言及している(「新しい規制や新しい法律や」)からである。(80)

ドイツのユダヤ人のなかにはステファンの妻と同様にアメリカに亡命した人びとがいたのだが、エバの母親もそうすることを主張する。父親もユダヤ人を巡る情勢の悪化は重々承知していたが、ヒステリックにがなりたてる「甘やかされた妻の言いなりになることを拒否し」耳をかさなかったのである。(20)

ユダヤ人への規制の強化と公園での出来事

フィリップスはそのようなシオニズムへの動きを描きながら、他方ではドイツ国内でのユダヤ人を巡る状況の悪化とそれをどのようにユダヤ人が受け止めていたのかを描いてゆく。

ある日、エバは小さな公園の木陰のベンチに座っている。公園には誰も人がいない。しかし静寂のなかでエバは彼女がどうするだろうかと見守っている人々の視線を感じる。するとドイツ人の年配の夫婦が腕を組んでやってきて、エバをじっとみつめる。妻は夫の態度をうかがう。エバはその夫が何を考えているのかを完全に理解しているのだが、「わたしはここに座る当然の権利があるんだわ」と思い、相手の考えることなど気にしないという態度をとる。二人がエバの前を通りすぎてゆくとき妻の方は後ろを振り返り、エバにニッコリと微笑みを残す。(31)

最初読んだとき、寓話風の時空を越えたそして謎めいた物語に出会ったような気がした。しかし、歴史書で1935年9月のニュルンベルグ法によってユダヤ人の公民権が剥奪され、公園のベンチもアーリア人用とユダヤ人用に分離されることになった¹⁾、ことを知り、これがきわめてリアルな現実の出来事なのだとわかったのだ。これによって何故誰もいない公園のベンチに一人腰掛けていたエバが人の視線を意識せざるを得なかったのかも理解できる。小説には言

及されていないが、ユダヤ人はこの時期にはユダヤ人であることがわかるように星印しをつけるよう義務づけられていたため、一目でベンチにユダヤ人が座っていることがわかったのであろう。エバが意識していた人々の視線とは自分の行為の反抗的な意味の自覚である。このエピソードはエバの誇り高い気概（「わたしにはここに座る権利が当然あるのよ」）と年配の夫婦の夫の方の厳しい視線と、それとは対照的な妻のやさしい微笑が見事な対照をなす印象的なエピソードである。

公園のベンチでの出来事から50ページほど後に置かれている次のエピソードはそれから数年し、さらに悪化した状況のもとで起きた出来事を描いていると推測できる。すなわち1938年7月25日にはユダヤ人医師のアーリア人への診察が禁止され、事実上ユダヤ人の医師が仕事を続けることができなくなる。そしてユダヤ人へのナチの突撃隊による暴行やいじめが日常茶飯事となり、もはやアメリカへの移住も手遅れとなる。ユダヤ人のなかには隠れ場を求める人たちもでてきているという状況である。このエピソードはそうした状況のなかの一コマである。

医師の自殺とカフェの出来事

父親は、エバをともなって友人の医師の葬儀に参列し、その足でカフェに立ち寄りあるカップルに遭遇するのだ。

そのカップルは同席を願い出たあと、ただちに旅行で泊まるホテルや出かける時期について話し始める。二人は年齢が30才は違うと思われる恋人同士だった。だが若い女性は年配の紳士と対等に、しかも親密に話している。そして意見が違えばハッキリと自分の意思や事情を主張する。女性には恐らく家庭があるのであろう。旅行に出かける時期をめぐって二人は対立する。しかし、相手にタバコをつけてやるという親密な行為で緊張を解きほぐす知恵を女性は心得ている。そのように、いわくありげな二人の関係にエバと父親はそれぞれ違った意味で強く興味をひかれる。

そこで場面は葬儀のエピソードに変わる。それは父親と同年代の医師の葬儀だった。死因は心臓麻痺となっていたが、そのような兆候は生前にはまったく見られなかった。老いた母親以外に家族も恋人もいない寂しい葬儀に参列しながらエバはふと、その医師は診療活動を禁止され、生きる目的を失い自殺を選んだのかも知れないと思う。エバの家族も4階建ての家を離れ、隠れ家住まいに入る間際のことであった。家路の途中父親と初めてカフェに立ち寄りエバは急に大人になったような気がするのだが、他方、父親は深い物思いにふけていたのである。

父親は目の前で恋人達が展開するドラマをどのような思いで見っていたのであろうか？父親の心にはユダヤ人への迫害の度が深まり、しかも、もはやアメリカに移住する道も閉ざされ、築き上げた財産を放棄し、隠れ家生活に移るしかなかった自分たちの状況への深い絶望感とアメリカに移住する時期を逸した自分への悔恨の情が渦巻いていたであろう。目の前の二人がそ

のような状況とは対照的な恋の世界に生きているということ自体が父親の絶望感や悔恨をより一層浮き彫りにしたのかも知れない。

そうしたなかで二人の旅行を巡る議論も妻と自分とのアメリカへの移住をめぐるいさかいを彷彿させたのかも知れない。「そんなに大きいホテルに泊まるのはお金の浪費よ」という若い女性の言葉は、いつまでも待っているのは「時間の浪費よ」という妻の言葉と重なったかも知れない。「夏まで待つ危険を冒すわけにはいなかんだよ」という年配の男性の言葉はアメリカへの移住を迫った妻の言葉と重なりあったかもしれない。

若い女性との不倫の恋に人生を燃やしている目の前の自分と同年代の男性を見ながら父親は、愛する人がいないために仕事を奪われただけで、あっけなく命を絶つ決意をした友人の人生や、職業的にも財政的にも成功を治め、反対を押し切って結婚し、二人の子供を授かったとはいえ、妻との不和に悩む自分の人生を思いかえしたのかも知れない。人間が生きてゆくうえで何がもっとも大事なのだろうか？という問いが湧き上がってきても不思議ではない。

父親はエバに「何が欲しい？この人生でということだけど」と突然、予想もしなかった問いかけをし、エバを驚かせる。これは14歳のエバにとっては手にあまる質問であった。父親は大人としての自分が今考えていることを子供に聞いてしまったのだ。エバは「結婚し、二人の子供をもち」「幸せになることよ」としか答えられない。それは子供の考える素朴な答えであり、父親の質問の真意への答えではないことを意識する。だが父親は「それはいい答えだよ」と優しく答える。興味深いのはテーブルの反対側に座る若い女性が二人の会話に反応し、エバをちらっと見、目をそらしたことである。若い女性はもしかしたらエバのいう「幸せ」である「結婚」と「子供」を体験し、なおかつ不幸であったのかも知れない。エバの言葉はその幸せを自ら捨てようとするこの女性には自分への世間の皮肉や批判と一瞬間こえたのかも知れない。だが次ぎの瞬間、それは少女の素朴な言葉に過ぎないと思なおしたのかも知れない。

他方、エバは、その若い女性が自分の皿の上にバターを塗ったパンの小片を置いてくれる年上の恋人のしぐさを「いぶかしげに」見るのを見て、「その魅力的な女の人はこの年上の男性といて本当に幸せなのだろうか」とふと感じる。若い女性は、年配の紳士が女性への優しさの表現として小さな子供にたいしてでもするようなことを自分にするのを見て、自分への男性の態度をいぶかったのかも知れない。エバは、先の素朴な返答とは対照的に女性としての鋭い感受性を見せるのである。

その後、カフェでの出来事は新たな展開を見せる。有名な女性歌手が突然店を訪れ、その歌手を父親はじっと目詰めるのである。彼女はアメリカに出国することになっていたのだ。そのときエバは「父親の思いは自分の家族と亡くなった友人のことから遠く離れたところにあることに気づく」。アメリカでの未来をもっている歌手を見、「絶望しか待っていない自分の未来を父親はすでにこのとき知っていたのだ」と後に強制収容所での両親との永遠の別れを向か

えたときエバは気づくのである(153)。

追い詰められて行くユダヤ人

そのようなエピソードの直後には、学校でのユダヤ人へのいじめが続発し通学時に通りを安全に通ることも困難になる状況のもとで、一家が町の反対側の地区に密かに隠れ家を設け、妹のマーゴットだけが家族と離れ離れとなるエピソードが描かれている。娘を手放さなくては行けなくなった母親の痛切な心がユダヤ人への不当な仕打ちへの怒りとなり「あの人たちはあるときは隣人で、その次の日にはわたしたちに唾をひっかけるのよ。自分ではないものになることに誇りを抱いていたなんて、わたしたちは間抜けね。わかる？この世では理由なしに人を射殺したりしないは。理由があってしかるべきよ。何も悪いことをしたことの無い人にこんなに腹を立てるなんてどうしてできるの？」(93)と叫ぶ。ここにはドイツ文化に「同化」することによって市民権を得ようとして裏切られたドイツのユダヤ人の気持ちが表現されているのである。

そのころに起きたのは、貧しいユダヤ人がすでにナチス・ドイツによって占領されていたポーランドの強制収容所に向けて輸送されるという事件である。「パパの両親は東方へ向けての列車にのった最初の人々に属した」(16)という部分はそれを指していると思われる。これは歴史的には1941年11月のことである。自分とは身分違いの家庭に育った娘と結婚した父親は貧しい自分の両親をある意味では恥じていたのだが、やはり心の底では愛していたのであり、その知らせに落ち込む姿をエバは敏感に捉えていたのである。

その知らせはエバの家族が4階建ての屋敷から隠れ家に移った直後にやってきた、とある。そしてエバが妹のマーゴットと永遠の別れを迎えたのは隠れ家に移る直前であった。マーゴットはその後、ある夫婦の家庭に匿われるのであるが、夫からの性的虐待に抵抗し悲鳴を上げたことによってナチに逮捕され、収容所で短い一生を終えることになる。だがそのことを知るすべもなかったエバの妹への思いは、最後まで続くのである。

エバの隠れ家生活とローザとの出会い

エバがローザに会ったのは16歳の時で隠れ家生活をはじめて少ししてのことであった。(61)それまでエバは勉強に疲れると台所の高い窓に身を寄せ外の世界を観察していた。窓からエバが毎日見つめていたのは以前の羽振りの良さを失い、落ちぶれ、力なく、惨めに生きてゆくユダヤ人の姿であった(60)。そうしたある日、外を見つめているエバに声をかけたのがローザであった。ローザはエバの隣の部屋に同じく身を隠す「ヴェールに包まれた」20代半ばの女性であった。エバの関心を引いたのは時折彼女の部屋を訪れ、軽くエバにウインクして部屋に消える男性の足音であった。エバはローザにその男性と結婚しているのだと打ち明けられる。だが

妻を訪れる頻度が次第に減少してゆくことにエバは気づき「何故一緒に住んでいないの」と尋ねる。ローザは夫がナチスに抵抗する地下組織の活動に加わっていて一緒に住めないのだという。何故ローザが隠れて暮らさなければいけないのか納得のいかないエバはそのことを聞くが「そうすると彼がわたしのところに来ることが難しいのよ」と答える。実はローザは身分の高い家の生まれで、エバの両親と同様身分違いの男性を選び、みずから苦難の道に足を踏み入れていたのだ。「彼女はあの男を忘れて自分の身分のものと一緒に暮らすべきだよ。そうすれば、まともな人生を生きるチャンスがあるのに」と父親は言い妻の顔をうかがう、とある。

42年の春、その年のうちにユダヤ人を東方に強制労働に送るという噂が流れる。(65)ローザの夫が最後に訪れてから3ヶ月になる。気になったエバはそのことを話題にする。「彼はあなたを捨ててしまったの?」と聞くエバにローザは微笑んで首を振る。エバは、何故彼は闘うのか、闘っても無駄ではないか、と質問をぶつける。無駄じゃないは、「わたしたちが」闘いやめればそれこそ敗北だわ、とローザは答える。幼いエバは「わたしたち」って誰なの、と素朴に思う。「でもわたしたちはすでに負けたのよ。あたりは敵だらけよ」、とエバはつい語気を強くして言ってしまう。しかし、ローザの顔に浮かぶ心の痛みを見てあやまる。ローザは「わたしたちは負けたわけじゃない。そしてわたしは彼の所にはいけない。わたしは妻なの。だからわたしは彼を訪れるところにはなくてはならないの。」「でもわたしたちと一緒にいるとあなたは危険だわ、ローザ。」「でもあの人と一緒にいるとわたしも危険なの。同じことだわ」とローザはいう。「でも(ユダヤ人ではない=筆者)あなたは(自分の家族と一緒にいれば=筆者)自分を救うことができる。わたしたちと一緒にいると、連中が夜やってきたとき(自分はユダヤ人ではないと)説明する暇なんてないわよ」。沈黙のあと、ローザは「わたしはこの道を選んだの。後悔はないは。本当なの」という。

会話の間からローザはユダヤ人ではないと推測される。恐らくはレジスタンス運動にかかわる коммуニストの夫と危険を承知で結婚した名門の娘なのだ。

隠れ家に移って二年目の夏にはユダヤ人の間でさまざまな手段による自殺が増え、生き延びるためには誇りを捨て去る人々が増えてくる。エバの父親は「獣みたいに振舞う人もいるが、わたしたちは人間だよ」といいながらも、まぶたを伏せる。「パパの強固に守られた人格は今や廃墟と化している」(66)とエバは思う。「生者が死者をうらやむときが来ると聖書にある」(67)、と父親は不条理そのものと化してしまった現実を黙示録になぞらえる。

ローザの自殺

やがて二年目の晩春が訪れユダヤ人が強制収容所に全員連れてゆかれる日の朝がやってくる。そのときエバが気になっていたのはローザのことである。「ローザは本当に夫からも見捨てられたのだろうか?」と気になっていたのだ。この間ローザは人と話すことを避けようと決

意したように、一人で部屋に閉じこもり、エバが目にするたびにその身体がちじんでいくのがわかったのだ。(67)移送される朝、別れを告げにいったエバはベッドの上で猫いらずを飲んで死んでいるローザを発見する。すべてを捨てて夫とナチスへの抵抗に命を捧げたローザも、孤独とユダヤ人とともに強制収容所送りとなる現実に絶望し、自ら死を選んだのである。このような救いのない悲劇的不条理がこの時代の日常だったのである。

ホロコーストへの道

これまでがホロコーストの序章であるとすれば、強制収容所への移送に始まる物語の展開はホロコーストの本編にあたる。ホロコーストとはどのようなものであり、それは人間にとってどのような意味をもっていたのであろうか？それを考えて見よう。

家畜運搬車での移送

ホロコーストはユダヤ人への人種主義に基づく民族そのものの抹殺を目的とした企てであった。その第一ステージが家畜運搬車による強制収容所への移送である。駅に向かって流れる「人生を破壊された人々」の波のなかにエバと両親は飲み込まれるのだが、「18歳にしてわたしは人生がいかに残酷になりうるのかを理解したのだ」とある。もう事ここに至っては強制収容所に黙って連れてゆかれるしかなかったのである。父親は、怒りが収まるのを待つのだという預言者の言葉に従ったのだが、怒りは収まる様子を見せなかったのである。そして根こそぎ、ユダヤ人は町から連れさられ、後は焼き払われるのである。

家畜輸送車による移送の様子の描写は、移送の3日目から始まる。幼い赤子をかかえた母親が子供に母乳を与えていて、疲れ果てた人々がまどろみはじめる。水も食物も与えられず、糞尿の入ったバケツからの臭いが鼻を突いて眠る所ではないなかでも、三日もたつと人々はもう無感覚になり眠りこけてしまうのである。そしてエバの視線は力なく身を寄せ合っている両親に向かう。「二人には屈辱が降りかかった」のである。移送車に入れられてからの喧騒と無秩序のなかに「なんらかの秩序と規律をもたらそう」という努力を両親はしたのだが、罵声にかき消され、黙っているしかなかったのである。エバは、今後自分たちはどうなるのか、また家族が離れ離れになるかも知れないことを思うと眠りにつくことができなかった。そしてエバは、彼女をじっとみつめる好色な目付きの二人の聖職者と思しき男の視線におびえるのである。

だがその二人のうちの一人は皆の制止を振り切って首をつって自殺する。たまらない悪臭のなかでも口を開いて眠る女性、「かたまりとなった疲労にとらわれてお互いに抱きあっている両親」、社会的地位が高かったものも、そうでなかったものも「運尿とゲロのしみこんだ藁のなかに横たわりながらなんの区別も消え去ってしまう。エバがとりわけ気の毒に思ったのは生理を迎え、隠し仰せなくなった同年代の女性であった。

屠殺場に運ばれる牛や豚の如く何のためにどこに連れて行かれるのかの説明もないまま運送され、水や食料という人間の生存の最低条件も与えず、排泄物との同居を強いられ、生理を人の目に曝し、努力と才能によって築いてきた地位や名誉が何の意味ももたない状況に置かれるこのような状況は、人間が文明を築くことによって生み出してきた品位や尊厳の蹂躪以外の何者でもない。

強制収容所での選別 心理的分裂の発現

目的地についたユダヤ人たちは、すべての貴重品を放棄させられ、働けるものとそうでないものとに選別され、働けないものはガス室へと送られることになる。いやおうなしのこの選別に少しでもさからえばただちに犬のように撃ち殺される。エバはここで両親と永遠の別れをすることになる。別れ際、父親はエバに掛ける声さえなかった。そのときエバは、あのカフェでの出来事のときにすでに父親はこのような日が来ることを知っていたのだと悟る。(153)

生き延びることになったエバを待っていたものは身体の毛をすべて刈り取られる作業であった。その仕事に従事するのは同じユダヤ人であるが、それを楽しんでいるように見えた。その女は「あんたたちが劇場に行っているときに、わたしたちはすでにここにいたんだよ」とエバに笑いかける。恥辱にまみれたエバは、自分の名前を忘れようとするが、名前は忘れられることを拒否するのだ。(164)

ここにはエバの収容所体験を理解する上で重要なことが描かれている。「エバが自分の名前を忘れようとするが、名前は忘れられることを拒否する」というところである。エバの人格は恥ずかしさのあまり、恥ずかしい行為にさらされているのが自分であることを否定する自分（「名前を忘れる」）と、認める自分（「名前は忘れられることを拒否」）の二つに分裂するのである。ここでは恥辱感とその直接の原因となっている。その恥辱感とは文明のもとで生きる人間が通常体験しえない恥辱感である。強制収容所は、その文明の否定であるがゆえに、恥辱感を日常化・構造化する。

そしてそのような恥辱感に曝されたとき起こるのが心理的分裂なのである。これは収容所の生活のなかでは構造化されている。後に描かれるのだが、母の死を自覚している自分と母親がいまだに自分の傍にいと幻想する自分や、自分の分身を幻想によって作り出す心理である。あまりに自分にとって辛い体験に直面したとき人間の心理に起こる現象として、それを忘れようとする「感情」と覚えている「理性」への分裂、いわゆる理性と感情への分裂といってもよからう。これは理性の不足による心理現象ではない。理性を備えた人間であるからこそそのような心理的分裂に陥る危険を持っているのである。逆に、感情に傾く人間は「たまらない悪臭のなかでも口を開いて眠る」ことができるのかも知れない。それとは逆に、移送車のなかの自殺を選ぶ好色な聖職者などは、ある意味で理性的存在であるがゆえに分裂と自己矛盾に耐え切

れなくなった例なのかもしれない。エバはこの分裂を抱えたまま最後まで生き残り、最後には糸が切れるごとくに自殺するのである。

自己分裂の原因となるのは極度の恥辱感、屈辱感、悲しみ、孤独、孤立感であったりする。このような心理的分裂は心の傷でもあり、いわゆるトラウマの実態なのではないだろうか？それがトラウマたる由縁は、上記の「忘れよう」とする自己と「忘れられない」自己への内面的分裂が日常化・構造化され相互に拮抗し、容易には消えさらないという点にある。つまりトラウマを抱えた人間とは、過去が忘却という過程をへずに現在として行き続けている人間のことでないだろうか？このような仮説をもってさらに読み進めてゆこう。

収容所の実存的意味

かくしてエバは両親と永遠に別れ、収容所生活を送ることになる。フィリップスは収容所生活を、その実存的意味を照らし出すという観点から描いている。エバの朝方の悪夢に現れる、母親が絶望し自殺しようとする姿、それはエバ自身の生きる闘いを放棄したいという願望の投影なのかもしれない。だが夢のなかでエバは母に声をかけてやめさせようとする。これは自分の中の自殺願望を弱さとして否定するもう一つのエバの意識なのだろう。だが母はこの汚いぼろ切れのような娘を自分の娘だと認めたくないのか無視しようとする。ここにはエバの惨めな自分の姿への恥辱感を見ることができよう。だがより深い人間としての理性と尊厳の意識はそのような低い意識を凌駕し、執拗に母親に声をかけさせるのである。そしてエバは母親を恥じ入らせ、自殺を思いとどまらせる。こうしてエバの悪夢は人間としての屈辱的な体験に敗北し、死を選ぶのか、それとも、そうしたなでも尊厳ある生を求めようとするのかという人間としての根底的な問題をめぐるエバの内面の葛藤の投影なのである。

生きる意志は収容所の生活のなかでは人間としての尊厳ある生と矛盾するという壁にエバはぶつかる。それをエバは「悪夢より恐ろしい日常」という言葉で表現している。それは生きるために人間の命の尊厳を忘れること。「生きるためなら人にキスすることだってできただろう」「自分や他者への態度を変えなかったら、おそろしい八エの群れにたかられて死んだだろう。」「一切れのパンがライフ・ラインとなる。空腹のために考えなしに食料のために人を殺させしめられたら。盗みでもしない限り、人々を数週間ですぐ死へと追いやることを意図した食事なのだ。」「疲れ切った体を引きずりバラックに帰ると、月夜のなかで列をつくり目だけをギラギラさせパンの配給をまつ。生き残るために必要なパンをめぐる醜いやりとり。だれも信用できない。死ぬことはむしろ簡単なことだった。むしろ生きることのほうが恐ろしいことだった。しかし生き残るために激しく闘わなかったら電気を消すように死んでゆくだけだ。」「だが死はささいな日常であり、八エがわきの下に這い上がってくると同じように習慣のようなものになってしまっていた。ただ恐れるべきはチフスでのたうちまわって死ぬことだけだった。骨と皮になり

ながらも、コーヒーで体を洗い清潔に保つこと、サルのようにお互いにノミを取ることを。

こうして生きる意志を貫こうとすると収容所のなかではエゴを剥き出しにし、醜い自分をさらけ出し、人間としての尊厳を犠牲にしなくてはならない。それに抵抗しつつ生き延びるということの難しさ（「かつてはセックスをしたこともある女性がいまや朽ち果て、自分の糞尿に埋もれている」）、この難しさは死への願望を生み出す（「死ぬことは簡単なことだった」）。むしろ困難なのはサル同様の行為であっても清潔さを保つためにお互い蚤を取り合うという形であれ最低限の人間としての品位を守りながら生きることであったのだ。

通常の市民生活においても尊厳をもって生きるための闘いは存在する。その意味で収容所での実存的状況はある意味で人間としての普遍的なテーマである。だがそれはいわば衣食足って後の生き方の問題である。だが、収容所のなかでは生きることそのものが人間の尊厳に反するような状況のもとでの人間的尊厳の追求なのである。

「排泄」と「文明」

フィリップスが輸送中の貨車や強制収容所の生活の一コマとして何度も描いているのは「排泄」の問題である。「排泄」は人間の生存にとっての根本条件の一つであるが、人間が文明の進展のなかでセックスと同様に最もプライベートな部分に位置付け、かつ清潔かつ快適な環境を整えてきたものでもある。プライベートなものにするのは人目に触れないことを保証し、あたかもその人間の存在の本質とは無縁のものとして位置付けるということの意味する。他方、人間はプライベートな行為が最大限快適な条件で行なわれるよう環境整備に意を尽くしてきた。快適かつ清潔であることはその国の文明度にかかわるものとされてきたのである。何故なら「排泄」という行為は動物と人間の両方に共通する部分であり、そこに置いていかに差異化するのかが人間と動物の違いを形成するからである。

強制収容所の生活はまさにそのようにして「排泄」にかかわって人類が築きあげてきた動物との差異化の産物としての文明を否定し、人間以前の状態に逆戻りさせ、言うにいわれぬ屈辱感、恥辱感を収容者とりわけ女性に与えたのである。

バラックのなかでは便所はなく、バケツにしなくてはならない。しかも夜の間にはすばやく。プライバシーなどはない。公衆の面前での恥辱。バラックのなかは鼻をつく悪臭に満ちている。早くしないといけない。電線の上の小鳥のような格好でバケツの上にまたがり、しぶきをあげて、どっとださなくてはならない。すばやく。便をぬぐう紙もない。生暖かい尿が足をつたう。エバはそのあと罪悪感にかられる。父親はいつも他の人の使ったトイレに座ってはいけないと言っていたからだ。

死者への取り扱い

死者への敬意は葬儀という形で人間が儀式化して表現し、文明の進展の一環に組み込んできたものである。「死」というこれまた動物と人間が共有する現象にたいし、動物との差異化のもう一つの現れということができよう。また死者への敬意は生者自身が自己の価値を自覚する行為でもある。だが収容所では死者への敬意と生者の価値の自覚の双方が否定されるのである。生者は死者を単なる物として処理するようになり、「（「どういう体が燃えやすいのか、そうでないのかがわかってくる」）同時に、生者の命は護衛の恣意にあっけないほど依存している。（死者を燃やす行為は「護衛に見守られての仕事である。護衛の方を見てははらない」）。守衛を見ろという行為自身が意思の表示として、つまり対等の主体としての自己主張とみなされるのである。ましてや反抗は許されない（ある女性が金網の向こうにメッセージをつつんだ石を投げ、見つかって処刑される。自分で自分の穴を掘り、横たわり、こめかみを打ち抜かれるのである）。収容所での死者への敬意はかつての生者を死においやったものへの批判や反抗につながり自らの死へと繋がってしまう（かつては幸せに輝いていた無残な遺体を見て、祈りを上げるだけの活発な知力の残っているものはその性で死ぬことになる）。

こうして強制収容所のなかで生きてゆくためには、生者は死者を物として扱うと同時に自らの人間としての価値を忘れることをよぎなくされるのである。

働けなくなったものは殺される。エバの悪夢のひとつはこれにかかわる。（朝になって起き上がらなくてはならない。エバはあらん限りの力で立ち上がるが今度は動けず、立ち去ってゆく他の人々を見る、そのような悪夢に苛まれるのである）。

寝床はあたかも奴隷貿易船を思わせる（6人が一枚の厚板の上に横たわり、その上にも下にも同じように人々が横たわる板が重なる）。

そうした生存条件のなかでかつての生活のなかの儀式はジョークになってくる（そうしたなかで誰かが、ユダヤの金曜の儀式を済ませたかと尋ね、失笑をかう）。(166-172) 儀式とは高度に人間的な営みであることがわかるのである。

フィリップスはこのように強制収容所の生活における人間を人間たらしめてきたものの破壊や収容者自身による自己否定を描くことによって逆に人間とは何なのかを読者に問い掛けているかにも見える。

そしてそれは自己否定を通じて人格を分裂させ、トラウマという形でエバの心に深い傷を残すのである。

ベルゲン・ベルゼン収容所

そのような収容所生活に転機が訪れエバは別の収容所（ベルゲン・ベルゼン）へと移送される。敗色が濃くなり、怒涛のように押し寄せるソビエト軍の前に撤退をよぎなくされたナチ

ス・ドイツがポーランドでの強制収容所の実態を隠すために収容者をドイツ国内の収容所に移送したのである。エバがそこに移送されたのはテキストの記述でイギリス軍によって解放される4ヶ月前とあり、実際にベルゲン・ベルゼンが解放されたのが1945年の4月のことなので、恐らくは1944年の12月頃のことであろう。『血の性質』の物語はベルゲン・ベルゼンを解放するためにやってきたイギリス軍を見るエバの描写から始まるのである。

エバとジェリー

骨と皮になり、深く精神的なトラウマを負いながらもかろうじて生き延びたエバの前に現れたのはジェリーというイギリス軍の兵士であった。ジェリーはエバにしつこく求愛し、イギリスに来るよとというのである。だがエバの脳裏にあるのはこれまで述べてきた過去であり、家族とのわかれと収容所での悪夢のような体験である。エバをかろうじて支えてきたのは別れた姉のマーゴの思い出と、彼女との再会へのはかない願い、そして母がいまだ生きていて自分とともにいるという幻覚である。そうした心境にあるエバにとってジェリーはマーゴの居場所を探してくれる伝手としての意味しかない。ホロコースト体験を共有しない二人の間には何の接点も存在しないからである。

しかし、いざ収容所から解放され、母が自分とともにいるという幻覚から覚めたとき、エバにはこの世界のどこにも居場所がないことに気づく。イスラエルに祖国を求める人々もいるがエバにはその意味がわからない。そして唯一自分を迎え入れてくれる場としてジェリーを思い出し、無意識のうちにジェリーが自分をロンドンに呼び、結婚しようという手紙を自分の手で書き、それで自分を納得させつつ、海を越えてロンドンにわたるのである。だが、ドアを開けたのはジェリーの妻であり、ジェリーは出征時の一時の感情に負けたことを後悔し、エバを体よく追い返そうとする。こうして再び人生に裏切られたエバはそのショックから病院にかつぎこまれ、そこで自殺するのである。

エバを自殺に追いやったものは何か？それは徹底的な孤独感なのである。この世にエバをつなぎとめてきたのは父親や母親、そしてマーゴットの思い出であった。エバは心の必要から死んだ母親がまだ生きていて自分の周りにいると思い込んだ。それが幻覚であることを自覚したとき、次に彼女が想像したのがジェリーの存在しない手紙であった。ジェリーは彼女が頼れる唯一の手がかりだったのである。嘘であってもエバの心の必要はその手紙を自分で書かせたのである。そしてパブでジェリーが言うことがなくなり、バーで友達と冗談を言って笑うのを見たときエバの心のなかで「あなたはこんな人じゃなかったでしょ」と思い、突然わめきちらし始め、病院に運ばれたのである。だが彼女はこの瞬間に「言葉を放棄した」と書かれている。

フィリップスの登場人物には言葉をなくし、何も語らない人々が何人も登場する。いわはフィリップスに特徴的な主人公の描き方なのである。これは何を意味するのか？人間にとっての

生きる意味は他の人間でしかない。言葉は他者とのつながりのためのものである。だが他者とのつながりへの希望を失い、徹底した孤独に陥ったとき、人にもはや言葉は必要なくなるのであろう。イギリスに立つ前からエバは自分の分身ともいうべきベラと彼女が名づける少女が陰のように付きまとっているのに気づく。それは他者ではない。奥深い自分の分身なのであり、悲しい顔つきをしてエバを見つめている。そして、最後にはベラしかいなくなる。

このようにしてエバの物語は『より高い』において、家族をホロコーストに奪われ、一人イギリスに渡ることになったイレーンがイギリスで彼女に求婚した男性との離婚を経て、精神科の病院に送りこまれるのと類似した構造をもち、またその内容においても男性の側がエバやイレーンの悲惨な体験に基づくトラウマを理解・共有できず、それが彼女の孤立・疎外感を深めたという意味でも同じ構造をとっているのである。ここには場所的・心理的ディアスポラのテーマが繰り返されているということができよう。

『より高い』とのもう一つの類似性は、『より高い』においてイレ ンへの理解者として立ち表れながらも結局は彼女に別れを告げる黒人男性とよく似た役割を果たす人物が表れるところである。それはエバが収容された病院の精神科医である。エバと精神科医との間にはロマンチックな関係はないが、精神科医はエバの自殺という外見からは予想しなかった事態によって初めて収容所体験による心理的トラウマの存在に気づき、多くのエバのような体験を生き残った人々の研究にとりかかり始めるのである。

「額縁」の意味

フィリップスは『血の性質』全体のプロローグとエピローグにいわば「額縁」のごとくステファンを中心としたエピソードを配置している。それはイルラエル建国前夜のキプロス難民キャンプと、それから50年ほどたった現代のイスラエルを描いた二つの物語である。それは何故か？ホロコーストを単なる過去としてではなく、その上に築きあげられたイスラエルをも視野に入れ、微妙な形であれホロコーストを理由にイスラエルを全面肯定する視点に異議を提出しているというのが私見である。

プロローグ

プロローグではキプロスの難民キャンプを舞台にしたステファンと難民のモーシュという少年のエピソードが描かれる。パレスチナを植民地にしてきたイギリスは、迫害されたヨーロッパを逃れ、パレスチナに向かったユダヤ難民を一度にではなく徐々に入国させる方針を取り、入国までの間、キプロスに滞在させたのである。ステファンはそのような難民のイスラエルへの定住を支援するためにパレスチナからやってきた医師や教師などからなるボランティアの一員としてとしてキプロスに2ヶ月滞在していたのである。

ステファンはモーシュから「その国の名はなんと言うの」と聞かれ、「僕たちの国」だと訂正する。だがその反面、他のポランティアの青年たちと自分を比較し、「彼らほど理想主義的ではなくなっている」と今では思っている。ステファンは、この人々に希望のある未来を約束したいと願ってはいるものの、家族を失い、かつて住んでいた家を追い払われたモーシュが「復讐心を持って」イスラエルの秘密の軍隊に参加しようとしているのを知ると複雑な思いに捉われるのである。というのは、自身、地下の軍事組織に続き、「殺すのはもうたくさんだ」と感じていたからである。また、イスラエルというユダヤ人国家建設の前夜にあってステファンは、自分がかつて捨て去った古いヨーロッパを自分の中にもち、兄やその娘たちへの郷愁に駆られる。そしてお互いの人生の選択を尊重しあい別れた妻への郷愁と罪の意識に捉われてもいる。

エピローグ

エピローグではそれから約50年後、年老いかつての理想と情熱を失い、孤独にさいなまれるステファンと若い女性との出会いが描かれる。マルカというその女性は、エチオピアの黒人ユダヤ人である。エチオピアの黒人ユダヤ人は、ユダヤ教を信じることになった古代北アフリカ人の末裔であり、農業や織物を生業とし、近代世界とは無縁の環境のなかで生きていたのだが、イスラエルは、彼らもユダヤ教徒であるという理由で祖国を持たず、無権利であったという理由で80年代の末に空輸し、数世紀を飛び越え、現代世界にタイムスリップさせたのであり、現代イスラエルにおいて最も貧しい階層をなしている¹²⁾。

物語の進展のなかで明かされるのは、退職し、年金生活に入り、心臓発作で倒れた後、新たに人生を始めようとする今や80歳に近い孤独なステファンの姿である。それを慰めるものといえば、アメリカに渡り別の人生を歩むことになった元の妻と娘の記憶以外にはなかったのである。そうしたなかでステファンは新たな人生の出会いを求め、ダンスクラブに出かけるようになっていた。それは年配の独身男性を主な対象とした会員制のダンスクラブであった。そこにはクラブによって雇われた娼婦を含む金に不自由する学生等の若い女性たちがひと時の楽しみを提供してくれるのである。

ある日ステファンは、部屋の反対側に一人で座っている女性を長い間見つめていた。彼女は感情を示さないマスクのような表情を浮かべ、他の女性が誘われると大げさに喜んで見せたり、誘われないと不満げな表情を示すのとは対照的であった。そしてその女性は美しかったのである。しかしその女性を他の男性たちは無視する。そしてそれを気にする風もなく彼女は座り続けていたのである。

フィリップスは、ステファンがマルカという女性をダンスに誘い、やがてワインを飲みながら会話し、ホテルの一室を取り、一夜をともにするエピソードを描いているが、物語の内実は、

ステファンの心に起きる彼女との距離と困惑なのである。その原因はステファンがマルカの背景や文化、そして彼女をめぐる状況を知らないことにあった。

読者がそれを知るのは、ステファンとマルカの物語の合間に散りばめられているイタリック体で書かれたマルカの内的独白を通じてなのである。マルカの家族は、電球も電話もみたことのないようなエチオピアの砂漠のなかの村に住み農業や織物で生活を立ててきたのだが、ある日、家族と村人とともにバスに乗せられ、アジスアベブのイスラエル大使館に連れて行かれ、イスラエルに空輸されてきたのである。だが、年老いた両親は新しい環境に適應できず、子供たちが言葉や習慣を学ぶにつれて連れて子供たちを失いつつあるかのように感じる。マルカは大学を卒業し、看護婦の資格をとったものの誰も雇ってくれないという境遇にある。弟は家を捨て、軍隊に入り、妹は、イスラエルに馴染めず自分にすがりつき、町のはずれのひどいアパートでの4人暮らしを強いられている。そうしたなかで一緒にやってきた村人のなかには自殺者も生まれるのである。以前の生活から何世紀も飛び越えさせて「何をあなたたちは証明しようとしているのか？」と怒りに似た感情がマルカの心には渦巻いている。そのような状況にあるマルカは生活費のためにクラブにやってきていたのである。

マルカはステファンと出会ったとき、差別的なまなざしを自分に向けるイスラエルの多くの人々とは違うステファンに好感をもったのである。ここにステファンの誘いに何のためらいもなく応じたマルカの理由があった。だが、ステファンは、それを素直に受け止めることができなかった。50歳も年上で、肉体的にも衰えを意識せざるを得ないステファンは、マルカの真意を測りかね、自分がばかにされているのか、それとも彼女は娼婦なのだろうかかと相手を疑い、自分の欲しかったのは心を通わせることのできる友人だったと思うのである。

逆にいえば、ステファンはマルカについて深く知ろうとは何もしなかったのである。二人の間の会話の背景には、イタリック体で書かれたマルカの怒りがあるのだが、表面的な会話と平行して存在し、両者は交差しない。たとえ交わったとしても、それはすれ違うのである。たとえば、ステファンが医者であったことを知ったマルカは、彼女は何故自分は看護婦としての訓練を受けたのかと聞く。「そうして何がいけないの」というステファンに彼女は笑って「あなたはわかっていないのよ」と答える。すると彼の心のなかには心を不安に陥れる疑問が湧いてくる。この女は何を望んでいるのだろうか？自分に屈辱を与えようとしているのだろうか？という疑問である。ベッドに入ったステファンは醜くなった自分の身体を恥、明かりを消す。マルカは驚いて「私の身体を見たくないの？」と尋ねる。ステファンは、「わたしは、君の友達になりたいんだよ」というがマルカは、「あなたは、すでに友達よ」という。「わたしは、誰ともホテルに来たり裸を見せたことはないし、わたしはそんな女ではない」、しかし、ステファンは「君の家族は心配しないかい？」と暗に彼女が帰るようにそむけ、マルカは次の朝一番のバスで家族の住むアパートに帰ってゆく。

こうしてこのエピソードは、一見すれば、孤独な男女のすれ違いの物語であるが、より深いところでは、エチオピア・ユダヤ人のイスラエル政府による空輸政策の犠牲者となった人々への無理解を描いているのである。

他方、孤独はステファンがクラブに通うようになった原因ではあるが、マルカとの出会いは、その孤独がそのようなことでは癒しがたいものであり、別の人生を歩むことになった妻と娘への罪の意識から逃れられないことを示しているのである。こういう形でホロコーストがいまだに生者を捉えていること、逆にいえば、現代イスラエル社会がステファンの理想を必ずしも実現していないことを暗に示しているのではないだろうか。

注

- 1) *The Nature of Blood* by Caryl Phillips, Faber and Faber Limited, London, 1997. なお拙論のテキストとしてはFirst Vintage International Editionを用い、本書からの引用は、その後にページ数を記した。
- 2) 『ホロコースト全史』マイケル・ベーレンハイム著 芝健介監修 創元社 1996年 42ページ
- 3) 『ユダヤ人ディアスポラと仮想の記憶 Caryl Phillipsの「より高い土地を求めて」論』加藤恒彦 立命館国際研究17巻1号2004年 p.106
- 4) *The Higher Ground* (London: Faber and Faber, 1997).
- 5) Bémédicte Ledente, *Caryl phillips*, Manchester University Press, p.151
- 6) 『ホロコースト全史』マイケル・ベーレンハイム著 芝健介監修 創元社 1996年 146ページ
- 7) 『ホロコースト全史』マイケル・ベーレンハイム著 芝健介監修 創元社 1996年 146ページ
- 8) 『ホロコースト全史』マイケル・ベーレンハイム著 芝健介監修 創元社 1996年 287, 291ページ
- 9) ここまでの記述は『反ユダヤ主義 - 世紀末ウィーンの政治と文化』村山雅人著 講談社 1995年と『ホロコースト全史』37 - 42を参照にしている。
- 10) *The Coming of the Third Reich* by Richard J. Evans, Penguin Books, 2003.
- 11) 『ホロコースト全史』マイケル・ベーレンハイム著 芝健介監修 創元社 1996年 78ページ
- 12) "Fractured Fences On Post-Zionism and Diversity" by ET OTTMAN, *Ritsumeikan Annual Review of International Studies*, Volume. 3, 2004, p.189.

The Holocaust Survivor in the *The Nature of Blood* by Caryl Phillips

This article will discuss the Holocaust part of Caryl Phillips' Novel, *The Nature of Blood*, partly focusing upon contextualizing the text in terms of discussing how Nazi with such racist ideas and ultra-rightist political approaches could seize power in Germany as well as in terms of giving specificities to the episodes described in the text where there is no mention of time and places and extracting the meaning of each episode from them, but mainly devoting itself to analyzing the traumatic experiences in the concentration camp in terms of how they causes splitting of a human psych into a self realistically estimating the reality and the one which cannot come to terms with the reality, resulting in creating illusionary visions, which will reveal the nature and meanings of Holocaust in terms of Civilization human beings have created as efforts to differentiating them from animals. The delineation of a suicide the protagonist of the story commit in England after the liberation reveals the depth of this traumatic experience which attracted people's serious attention only after the inner damage suffered by the survivors took form of actions unexpected by people who didn't know what happened in the concentration camps.

This article will also discuss the first and the last episodes which decorate the whole novel as if they are a framework for a drawing, which give alternatively, a glimpse of a post-World War Two Jewish attempt to create Israel as well as that of present day Israel State, which would be a perspective on the Zionist movement in retrospect.

(KATO, Tsunehiko 本学部教授)

